

大統領奪還指令2

自衛隊、籠城す

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▢（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▢キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画
地図
平面
迷惑
星

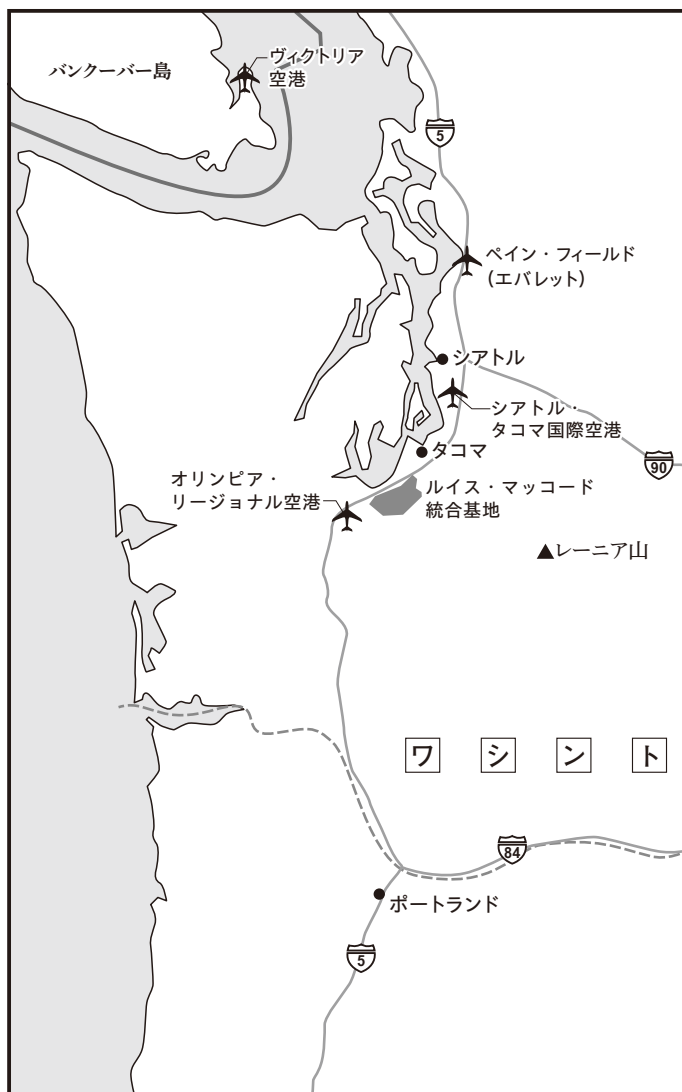
安田忠幸

目次

プロローグ	15
第一章 マッコードAFB	23
第二章 七人の侍	47
第三章 荒野の決闘	72
第四章 ヘルファイア	101
第五章 中立地帯	127
第六章 ラウンドの開始	152
第七章 エース・パイロット	179
第八章 大統領の背信	202
エピローグ	214

ワシントン州主要都市と空港







第1軍団司令部

ワトキンス・ホール

■ザール

テニス
コート

グレイ・
アーミー
飛行場

ペット・セメタリー

ソーミル湖

200m



フォート・ルイス
司令部周辺

登場人物紹介

////【日本】////

●陸上自衛隊

《特殊部隊サイレント・コア》

どもんこうへい
土門康平 陸将補。北米派遣統合司令官。コードネーム：デナリ。

〈原田小隊〉

はら だ たく み
原田拓海 三佐。海自生徒隊卒、空自救難隊出身。コードネーム：ハンタ

ー。
まち だ はる お
待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

た ぐち しん た
田口芯太 二曹。原田小隊の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひ が ひろ み
比嘉博実 三曹。田口と組むスポッター。コードネーム：ヤンバル。

〈姜小隊〉

かん あや か
姜彩夏 二佐。元韓国陸軍参謀本部作戦二課所属。コードネーム：ブラッ
クバーン。

ふくとめ だん
福留弾 一曹。分隊長。コードネーム：チェスト。

あね こう じ さね あつ
姉小路実篤 二曹。ロシア語遣い。コードネーム：ボーンズ。

ゆ ら しん じ
由良慎司 三曹。西部方面普通科連隊から引き抜かれた狙撃兵。コードネ
ーム：ニードル。

〈訓練小隊〉

はな わ び れい
花輪美麗 三曹。北京語遣い。コードネーム：タオ。

こま とり あや
駒鳥綾 三曹。護身術に長ける。コードネーム：レスラー。

《水陸機動団》

し ば ひかる
司馬光 一佐。アダック島派遣部隊司令官。水機団格闘技教官。

〈第3水陸機動連隊〉

ご とう まさ の り
後藤正典 一佐。連隊長。

ごん だ よう じ
権田洋二 二佐。副隊長。

さかき しん の すけ
榊 真之介 一尉。第1中隊・第2小隊長。

お が た な お き
緒方直紀 二尉。連隊本部運用幕僚付き。

い わ ら しん の すけ
居村真之輔 陸将。防衛装備庁・長官官房装備官。

遠藤兼人 二佐。飛行隊長。

あぎたつお
阿木辰雄 二佐。飛行隊長。TACネーム：バットマン。

宮瀬茜 一尉。部隊紅一点のパイロット。TACネーム：コブラ

青山博之 空将。防衛装備庁・長官官房装備官。

三村 香苗 一佐。統幕運用部付き。空自E-2 C乗り。北米邦人救難指揮所の指揮を執る。

倉田良樹 くらたよしき 二佐。統幕運用部。海自出身。P-1 乗り。

いちじょうさね み
一条実弥 総領事。

土門恵理子 二等書記官。土門の娘。

ふじわらかね と
藤原兼人 一等書記官。

M・A（ミライ・アヤセ） 通称・^{ソーサラー}魔術師“ヴァイオレット”。Qクリアランスの持ち主。

レベッカ・カーソン 海軍少佐。M・Aの秘書。F A-18 戦闘機乗り。

ギャリー・マクマホン 海軍大尉。コードネーム：バンディッツ。

●陸軍

〈第 160 特殊作戦航空連隊〉“ナイト・ストーカーズ”

ディクソン・ソプラノ 陸軍大佐。第四大隊長。

メイソン・バーデン 中佐。シェミア分遣隊隊長。

ゲーリー・アトキンス 中佐。第 4 大隊デルタ中隊。

ベラ・ウエスト 中尉。副操縦士。新大統領令嬢。

〈第 189 歩兵旅団第 358 連隊〉

サム・クルーソー 陸軍大佐。連隊長。

・第 2 大隊（機甲）

ソフィア・R・オキーフ 陸軍少佐。作戦参謀。

ロイド・アルバート 先任曹長。機甲科訓練教官。

メグミ・モリアーティ 陸軍特技兵。パイロット T A C ネーム：変異体。^{バリエーション}

・ミルバーン隊

アイザック・ミルバーン 元陸軍中佐。警備会社の顧問。かつてデルタ・フォースの一個中隊を率いていた。

●海軍

・ネイビー・シールズ・チーム 7

イーライ・ハント 海軍中尉。

●空軍

ヴァリシャ・カマラ 空軍大佐。ルイス・マッコード統合基地の米空軍上級サービス・コンポーネント司令官。インド系。

テリー・バスケス 中佐。終末の日の指揮機^{ドゥームズデイ・プレーション}“イカロス” 指揮官。

スペンサー・キム 中佐。NSA 基ってのスーパー・ハッカー。

●ルイス・マッコード統合基地

ミッチ・ロバートソン^{S M A} 最上級先任曹長。

●ワシントン州陸軍州兵

カルロス・コスポーザ 陸軍予備役少佐。

●F B I

ニック・ジャレット 捜査官。行動分析課のベテラン・プロファイラー。

ルーシー・チャン 捜査官。行動分析課の新米プロファイラー。

ロン・ノックス 捜査官。LA支局・サルベージ班。

●アルコール・タバコ・火器及び爆発物取締局（ATF）

ナンシー・パラトク 捜査官。イヌイット族。

●郡警察（テキサス州ノーラン郡）

ヘンリー・アライ 巡査部長。陸軍に二期在籍したマークスマン。

ペドロ・ガルシア 副署長。

●ロス市警

カミーラ・オリバレス 巡査長。

●レジスタンス

リリー・ジャクソン 元陸軍大尉。双発の小型プロペラ機パイパー・セミノール乗り。

●クインシーの若者たち

タッカー・トリート ドローン・クラブ“チェイサー”の部長。

ベッキー・スワンソン タッカーの幼なじみで、“チェイサー”のメンバー。

●“ナインティ・ナイン” = “セル”

フレッド・マイヤーズ 教授。通称“ミスター・バトラー”。

トマス・マッケンジー 大佐。通称“^{グラディエーター}剣闘士”トム。

アラン・ソ نداイク 少佐。

コニー・トラヴィス ペイン・フィールドの管制官。元アメリカ空軍伍長。

●アメリカ空軍士官学校

^{しまがやうにか}島谷利香 アメリカ空軍士官学校4年生。防大からの留学生。

ミハイル・ニジンスキー 少尉。ウクライナ国防大学校からの留学生。

●その他

^{にしやまじょういち}西山 穰一 ジョーイ・西山。スウィートウォーターでスシ・レストランを経営。

ソユン・キム 穰一の妻。

^{たしろでつや}田代哲也 西山の会社員時代の後輩。

^{ガン・スリンガー}ノア・ベラスコ “早撃ち名人”。元銃器店店主。

ビクター・ブランソン “^{ビッグ}太った豚・^{ビッグ}ビクター”。高校のレスリング部のコーチ。

トマホーク “^{トマホーク}手斧”。狙撃の名手。コマンチ族。

ミリー・ブッシュ “^{アバランチ}雪崩れ”。海兵隊憲兵上がりの黒人のセールスマン。

ディラン・ウエスト アメリカ大統領。元・上院軍事委員会の重鎮議員。

ダニエル・パク カリフォルニア州選出下院議員。

ヒロフミ・アヤセ 合衆国陸軍退役中将。ミライ・アヤセの父。

フランツ・ミュラー アスペン市長。

////【カナダ】////

●^Cカナダ国防軍・^J統合作戦司令部^O

アイコ・ルグラン ^C陸軍少佐。日本人の母を持ち、^C陸自の指揮幕僚^G過程^S修了。

////【イギリス】////

●王立海兵隊

・第45 コマンドー

イーヴリン・ジョイス 海兵隊中佐。大隊長。

エドワード・テナント 少佐。Y中隊長。

●イギリス外務省

アーサー・シンクレア 一等書記官。

大統領奪還指令2

自衛隊、
籠城す

プロローグ

首都ワシントンDCから北東へ二〇〇マイルのニューヨークは、珍しくも熱帯夜の夜が明けようとしていた。

フォー・ファイブ・コマンドーで知られる王立兵隊第45コマンドー（大隊相当）は、本来なら、前日、日没前にここニューヨーク州から撤収しているはずだったが、それは遅れに遅れていた。

ヤンキー
Y中隊を率いるエドワード・テナント少佐は、夜が白んで地上の様子がうつすらと見えてくると、クイーンズボロ橋、通称「59丁目橋」の真ん中付近で、四〇ヤード下のルーズベルト島を覗き込んだ。

クイーンズボロ橋は、マンハッタンから出て、イースト川を渡り、対岸のロングアイランドへと結ぶ。その真ん中に位置するのがルーズベルト島だ。橋は、建設からすでに一〇〇年を超える歴史的構造物だ。その対岸のクイーンズ地区、更にロングアイランドには、マンハッタン島に最も近い、ラガーディア国際空港がある。

大空港に近い、この橋から攻略を進める作戦は、妥当なものだったが……。

騒乱が起きた当日、マンハッタン島から外へ向かう脱出ルートは、全て封鎖された。橋は、渋滞しているとところを暴徒に襲撃され、車両は次々と

燃え上がった。橋ごと焼け落ちるかに見えた大火災は、三日三晩続いて、人が近寄れるようになってのは、ようやく六日目のことだった。

地下鉄は、暴動初日の大停電で止まり、以降は、避難民の避難場所になった。地下鉄の線路を歩いて島外へ脱出するには、それぞれの地上出口を支配するギャングたちに、それなりの通行料を払う必要があった。

そして、地下トンネルは今も^{くすぶ}燃^{くすぶ}つて誰も近寄れない。マンハッタン島から島外を往き来する地下道は一五本もあったのに、その全てで火災が発生して燻^{くすぶ}っていた。

島民は、島を出るには対岸とを結ぶ観光船やフェリーに乗るしかなく、それぞれの船着き場は、立錐^{りっすい}の余地なくごった返しているが、そこまで辿り着ける島民はまだ多かった。

略奪は、当然マンハッタン島全域に及び、凄惨

な殺戮^{ころりく}が繰り広げられた。この大混乱の悲惨さを最も如実に物語るシーンとして、セントラルパークに作られたSOSの人文字の写真が、あつという間に世界を駆け巡った。それは、人間の遺体を並べて作られた人文字だった。

マンハッタン島は孤立し、無法地帯と化し、ハリウッド映画が描くところのディストピア世界と化した。あるいは、ゾンビもののホラー・ドラマだ。ゾンビは銃を撃たないが、マンハッタン島を支配する暴徒たちは武装していた。

イースト川の真ん中に浮かぶルーズベルト島は、まるでマンハッタン島から剥がれ落ちた欠片^{かけら}のような形をしている。東西の幅はほんの二五〇ヤードしかないが、南北の長さは二マイルにも達する。地下鉄でマンハッタン島と結ばれる、最近流行の郊外だった。何しろ治安が良い。高級コンドミニアムが建ち並び、一時期は日本からの駐在員にも

人気のエリアとなった。郊外とはいえ、もちろんマンハッタンに対する郊外なので、一般人が住めるような街ではない。

東側対岸のクイーンズ地区へと渡るルーズベルト・アイランド橋が唯一自家用車の乗り入れが可能だが、島への自家用車の進入を制限するため、許可車両以外は、島に渡った所の駐車場までとなる。それがまた治安の良さを後押ししていた。

島民のほとんどは幸い、マンハッタン地区が停電した直後に、この橋を徒歩で渡り、クイーンズ地区への脱出へと成功した。

暴徒らは、移動手段が焼け落ちる前に島に渡り、お決まりの略奪を繰り広げたが、住民が避難した後だったので、レイプや銃撃戦は起きずに済んだ。宝石や有価証券の類いが残されているわけもなく、略奪はほとんど徒労に終わった。

そして、略奪が一段落すると、今度はマンハッ

タン島からの避難民が押し寄せてきた。最初は、地下鉄の線路を伝って。のちには、ボートや、家具にしがみついて泳いで渡ってくる者たちもいた。人口は少しずつ増え、その頃には、欧州各国からの最初の救援部隊がニューヨーク州に到達しつつあり、ルーズベルト島内に各国軍部隊の作戦司令部が置かれもした。

各国が救援部隊の拠点とするに絶好の立地だった。ラガーディア空港から至近。ほんの三〇〇ヤードの幅しかないイースト川を渡ればマンハッタン、数十万の避難民が立て籠もるだろうセントラル・パークだ。

そして、何より大事なことだが、無法地帯と化したマンハッタン島から、川で隔てられているせいで、暴徒たちが襲撃してくる恐れはほとんどなかった。

ルーズベルト島に集結した各国の支援部隊は、

ここを足がかりにしてマンハッタン島の治安回復に当たろうと活動していた。作戦は、予定通りに進むと思われた。

だがまず、前日中に、ドイツ軍司令部が撤退した。続いてフランス軍。英国軍もそれに続く予定だったが、マンハッタン島内の状況が依然として緊迫、かつ不明だったために、もう一泊をここで過ごすことになった。

クイーンズボロ橋の上で、焼け落ちた放置車両の撤去が始まったのは、つい二日前のことだった。まだ熱を持つ車両もあり、車内で黒焦げになった死体もある。

撤去作業は遅々として進まず、全長一二〇〇ヤードの橋を片側車線のみ綺麗にするのに、もう三日はかかりそうだった。

そして、渡った先のマンハッタン島に、文明はなかった。治安も行政も存在せず、銃と暴力が支

配するエリアで、その橋の掃除を始めた英国軍海兵隊は、防弾盾を本国から取り寄せ、工兵隊を守りながらの作業になった。

昨夜、一晩がかりで、橋の何カ所かに防御陣地を新たに構築した。橋の東側はほぼ片付いていたが、ルーズベルト島からマンハッタン島側は手つかずだ。

何カ所かに分厚い土嚢を積み上げ、五〇口径ライフル弾を止められるようにした。夜明けを迎えると、地上からボランティアの兵士たちが上がってくる。皆私服姿だ。電気がないので、保守用のエレベーターはすでに動いていない。避難用の非常階段を使って昇り降りするしかなかった。

上まで昇ってきた連中は皆一様に、強烈な臭いに眉をひそめた。ゴムを焼いた後の臭いが充満している。そこは風もある場所だが、それでも臭いは強烈だった。肉を焼いた後の臭いは人間のもの

だ。橋の復旧が遅れた理由は、籠もった熱ではなく、この強烈な臭いだった。それが弱まるまで待つしかなかった。

イギリス外務省一等書記官のアーサー・シンクレアが最後に昇ってくると、朝陽が昇ってくる方角を見遣った。

「おはよう、アーサー。一応、できるだけのことはやったつもりだ」

とテナント少佐は、少し気落ちした口調で言った。二人は、ブリタニア王立海軍兵学校、通称「ダートマス」の同窓だった。テナントはそのまま海軍士官として奉公したが、貴族の家系に生まれ育ったシンクレアは、家訓に従い士官学校を終えた後、オックスフォードへと進み、これも家訓に従い外務省へと進んだ。

「バトラーの演説を聴いたか？」とシンクレアが尋ねた。

「直接は聞いていない。ラジオを聴く暇はなかった。シアトル空港が陥落したのは知っている。L Aの復興は順調だったのに、これで滞るだろうな。日本は撤退するのか？」

「ここにも、日本の総領事館員が留まっているが、決定は聞かされていないという話だ。本国外務省は、自衛隊に留まるよう要請はしているが、それを無理強いできる立場にはないと。だが、カナダ軍が撤退した今、彼らがそこに踏み留まる理由はないだろう。私は、撤退すると思うね」

「残念だ……。そうとしか言えない」

配置に就いた兵士らは、すでに全員が背囊はいのうを背負い、撤収準備に入っていた。完全な夜明けを迎える前に、ここから退去する必要があった。マンハッタン島に陣取る暴徒らに、イギリス軍が撤退する様子を見せてはならないという命令だった。

幸い、マンハッタン島は、白い朝靄あさもやに包まれて

いた。ほんの三〇〇ヤード向こうの対岸は、霧に煙っていた。

フォー・ファイブ大隊を率いるイーヴリン・ジョイス中佐が四輪バギーに乗って現れ、「何をもたっているんだ！」とテナントを急^せかした。

「撤収させます！ 直ちに」

ジョイス中佐がバギーを降りて、シンクレアに敬礼した。

「シンクレアさん。外交官を強制的に立ち退かせる権限がわれわれ軍にあるか？ と本国に照会したら、面倒なことになるからやめておけ、と言われた。貴方たちを守ってくれる正規軍部隊はもうどこにもいないことになるが、それでよろしいのですね？」

「はい、中佐。軍歴のある者はいますし、銃や弾丸もある。食料も切り詰めればなんとか。マンハッタン島には、まだ数百名のイギリス人同胞が取

り残されています。果たしてそのうちの何人が無事かはわからないが、われわれは最後の一人まで助け出します。そもそも一人じゃない。EU各国外交団、日本も韓国もシンガポールもいてくれる。中国にはお引き取り願ったが……」

「対岸からはたった三〇〇ヤードです。アサルト・ライフルで狙撃できる距離だ。もし危険を感じたら、一目散にルーズベルト・アイランド橋へと向かってクイーンズ地区へと脱出してください。マンハッタンよりはマシだ」

「そうします。ホワイトハウスを守っていた部隊は、もう撤収したのですか？」

「はい。第42コマンドー、K中隊^{キロ}は、闇夜に紛れてホワイトハウスを脱出したと聞いています。代わりに、ペンタゴンから派遣された陸海空のアメリカ軍混成部隊が守備に入ったそうです。その部隊が、大統領派かどうかまでは聞いていないが」

「英軍は、アメリカから完全撤退ですか？」

「いったん、ロングアイランド島のどこかか、あるいはカナダ領で様子見することになるかもしれない。ドイツやフランス軍部隊は完全撤退する様子ですが……。ここまで来ると、この国は一度徹底的に破壊した方が良いでしょう。奴らの弾が尽きるまで」

「中佐、スカウダー城の撤収が完了しました。

先に行つて下さい。すぐ追いつけます！」

と今度はテナント少佐が急かした。

「では、シンクレアさん。ご無事で！」

中佐は、踵を揃えた格式張った敬礼を外交官に捧げると、バギーに乗り込んで去つていった。テナントが、ハンドシゲナルで「ゴー！ ゴー！」と命じると、防御陣地のこちら側からマンハッタンの島側に銃を向けていた兵士らが、一人、また一人と銃を下ろし、中腰に立ち上がつて後退し始め

た。

「アーサー、ここインヴァネス城を君らに明け渡す。プレート・キャリアや、ヘルメットもなしに無茶だとは思うが、一人でも多くの同胞を救えることを祈るよ。中途半端な形で撤収する羽目になつて残念だ」

「ありがたい、エドワード。部隊撤収は政府決定だから仕方ない。できる限り踏み留まるよ」

「うん。軍としてはたぶん、一刻も早く戻るよう、引き続き官邸と調整は続けるだろうから、君らを見捨てることはないと思いたい。そんなことになつたら、俺は辞表を書いて抗議するよ」

テナント少佐は、自分の装備からマガジンを二本抜いてシンクレアに手渡し、最後まで残った曹長の肩を背後から叩いて、「行くぞ！」と告げた。しかし、ここはついていた……、とテナントは思った。ホワイトハウスを守つたフォー・ツィー・

コマンドーは、暴徒との撃ち合いで一〇名前後も
の戦死者を出したと聞く。ここでは、作業中の怪
我人は出していたが、まだ弾を喰らって死傷した
兵士はいなかった。流れ弾は幾度となく飛んでき
たが。

噂では、フォー・ツー・コマンドーは、ハワイ
トハウスの放棄と撤退を早くから要求していたそ
うだが、この現状からは想像もつかなかった。

われわれは一刻も早く、暴徒に斬り込んで住民
を救出したいのに。いったい何が味方部隊をそこ
まで追い詰めたのか……。

アメリカ合衆国は、内戦へと突入しつつあった。
大統領選挙結果を巡る各州大陪審判決に端を發し
た各州での暴動は、中露が暗躍した大陸規模の大
停電も相まって、大暴動へと発展。折からの猛暑
も重なり、都市機能の麻痺を招き、混乱を收拾す

る立場にある軍隊は、軍内部の民主、共和の対立
を恐れて出動が禁じられた。それに代わり、たま
たま米国内で訓練中だった同盟国軍部隊が治安維
持活動に当たっていたが、状況の改善を見ること
はできなかった。

ことここに至り、民主党大統領は辞任。共和党
の大統領が新たに誕生したが、事態は悪化するば
かりで、ついに正規軍部隊が政府への反旗を翻し
た。

介入の度合いを深めていたNATO各国、ある
いは同盟国軍部隊は、アメリカ軍正規軍部隊との
正面衝突を回避するために、ひとまずそれら被災
地からの撤退を急いでいた。

第一章 マッコードAFB

ニューヨークから三〇〇〇マイル近くも離れた北米大陸の西端、ワシントン州シアトルは、この騒乱を巡る一つのチョークポイントとして争奪戦の最中にあつた。

「ナインティ・ナイン」、あるいは「セル」を名乗る暴徒らが、過激な指導者を担いで東へと行軍を開始した場所だつた。たまたまヤキマで訓練中だつた陸上自衛隊水機団部隊に阻止され、潰滅の一步手前まで追い込まれたが、シアトルに近いリス・マッコード統合基地で、正規軍部隊の反乱が起こり、遂にシアトル空港の奪取に成功していた。

その空港には、つい数時間前まで、シアトルのダウンタウンの解放作戦を指揮する自衛隊、カナダ国防軍、地元州軍や行政機関の指揮所が置かれていたが、間一髪のところまで脱出した。カナダ国防軍部隊は、いったんマッコード空軍基地^Aまで下がり、陸上自衛隊水機団は、戦車部隊まで繰り出してきたアメリカ陸軍正規軍部隊を、ドローンで阻止しつつ海岸沿いに脱出を試みた。

犠牲者は出したが、これもどうか脱出できた。ニューヨークの反対側、西海岸はまだ暗闇の中にあつた。この夏は、カリフォルニアもそれなりの暑さに見舞われていたが、さすがにカナダ国境

まで近づくと、夜は涼しい。

だが、その夜、シアトルの街は、硝煙しょうえんと発砲音に支配されていた。もちろん街に灯りはなく、高給取りで知られるシアトル市民のほとんども、とくに国境を越えて脱出した後だ。この街に残るのは、移動手段どころか、住む家も持たないジヤンキーや、よそから略奪目的で訪れた暴徒ら。そして、彼らに同調する、アメリカ陸軍正規軍部隊だった。

ルイス・マッコード統合基地は、陸軍が駐屯するフォート・ルイスと、空軍基地があるマッコード空軍基地が統合された西海岸最大規模の軍事基地である。

ただし、軍関係者らも住民も、未だにフォート・ルイス、マッコード空軍基地と呼んでいる。両者は背中合わせに位置するが、基地が擁する広大な自然保護区を含めて、とにかく、全米でも最大規

模の軍事基地と言つてよい。

それが、シアトル・タコマ国際空港から三五マイル南の距離にあった。途中は、ほぼ住宅街だ。かつてアジアからの移民を受け入れた港町のタコマがあり、日系人から「タコマ富士」と慕われたレーニア山が背後に聳そびえる。その裾野を東へと降りた内陸部に、ヤキマ演習場が存在する。

陸自部隊は、シアトル空港から一〇キロ近くを装備を担いで走っていた。米陸軍の戦車部隊に側面を衝かれ、また背後からは、反逆の指導者「バトラ」が率いる暴徒らに追われて、危機一髪に陥ったが、最後の最後、マッコード空軍基地から引き返してきたカナダ国防軍部隊によって救出されていた。

自衛隊員は、空軍基地から出てきた軍用トラックへと命からがら乗り込み、マッコード空軍基地への退却が始まっていた。

幸い、バトラー軍は、空港占拠で満足したらしく、それ以上の追撃はなかった。ひとまず攻勢は止んだ印象だった。

陸上自衛隊水機団部隊の指揮を取るのは、北米派遣統合部隊[〃]司令官の土門康平^{どもんこうへい}陸将補、元は陸上自衛隊第一空挺団第四〇三本部管理中隊付き、その実、特殊作戦群隷下の特殊部隊[〃]サイレント・コア[〃]の隊長である。

土門は、マッコード空軍基地へと後退するコンテナ型指揮通信車両[〃]ベス[〃]の中央区画にある指揮通信コンソールに陣取っていた。23インチモニターが十数台並ぶ指揮通信コンソールには、ドローンが撮影する、後退する味方部隊が映し出されている。

ベス[〃]の背後に、まだ二個小隊ほどの味方がいた。

ベス[〃]は、防空ユニットとしてオーストラリア製の[〃]スリンガー[〃]防空システムを随伴させていたが、すでに弾は尽き、レーダー及び光学センサーで、上空を監視するのみだった。その気になれば、敵はいつでも、徘徊型ドローンでこちらを攻撃できる。

敵とは、アメリカ陸軍正規軍部隊だった。

土門らが乗った車列は、タコマの北側の街でようやく警戒態勢を解いた。右側に、コストコとウォルマートの巨大な駐車場が見えてくる。

その駐車場に、マッコード空軍基地とカナダ国防軍の前進拠点が設けてあり、アメリカ空軍のSHORAD、イーグルス防空ユニットが何両か展開していた。この防空網を突破してドローンで地上部隊を攻撃することは、不可能ではないが、割に合わない攻撃になるはずだった。

カナダ国防軍の誘導に従い、土門はいったん高

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。